きらぼし健康手帖
第19回

急性期医療の役割

初診の際、大きい病院では紹介状がないと診療できないと言われ、疑問や不満を持たれた方がいらっしゃるかもしれません。しかし、これには意味と目的があります。今回は地域医療の仕組みについてお話しします。

杉村 洋一
疾病治療統括センター長
河北総合病院院長
入退院センター長
すぎむら　よういち
日本循環器学会専門医／日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本心血管インターベンション治療学会専門医・指導医／身体障害者福祉法第15条指定医（心臓）

急性期医療とは

医療には、大きく分けて急性期医療と慢性期医療があります。急性期は病気になって症状が出始めた時期、容態が安定しない時期を指し、慢性期は、病状が安定しているが長期の治療が必要な時期を指します。

地域のみなさんが適切な医療をより効率的に受けられるように、急性期医療と慢性期医療をうまく組み合わせた地域医療構想の議論が進んでいます。

◎多くの人材が必要な急性期病院

急性期医療を担当する急性期病院では、主に次のような患者さんの診療を行っています。

①心臓病や脳血管疾患（のうけっかんしっかん）など命に関わる緊急性の高い疾患の患者さん
②がん、胆石症、虫垂炎（ちゅうすいえん）など手術が必要な患者さん
③骨折などの外傷で手術や処置が必要な患者さん
④急激な疼痛（とうつう）や発熱など症状の強い患者さん

これらの患者さんを治療するためには、多くのスタッフが必要です。急性期病院では、24時間いつでも救急に対応し、重症の入院患者さんを治療するために、大勢のスタッフが交代で勤務しています。

例えば河北総合病院（分院含む）は病床数が407床なので最大でも407人の患者さんしか入院できませんが、その患者さんを治療するために常勤医だけで約140名、その他にも看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、臨床工学士などさまざまな職種の人たちが常勤だけで1000名以上います。これだけの大人数、しかも多職種の人たちが集まっている職場というのは、なかなかないと思います。

◎多くの設備、医療資源が必要な急性期病院

人材だけでなく、十分な設備や検査機器もそろっていなければなりません。高度な急性期医療を行うためには、多くの手術室やカテーテル治療室などはもちろん、集中治療室や無菌室、空気感染を予防するために空気圧を低くした陰圧室なども必要です。また、人工呼吸器や人工透析設備も多数準備しておかなければなりません。さらにCT、MRI、超音波検査（エコー）などのさまざまな検査機器も必要です。

河北総合病院
東京都杉並区阿佐谷北 1-7-3
8:30 ～ 15:30（午前のみの診療科は 11:30 まで）
※日・祝日・年末年始を除く
JR 中央線阿佐ケ谷駅より徒歩 5 分
河北医療財団 HP
新病院情報　LINE　河北チャンネル

病病連携と病診連携

しかし、人材、設備を整えても、それだけでは機能を十分に発揮できません。限られたベッドを有効に使うために、状態が落ち着いた患者さんにはなるべく早期にベッドを空けてもらわなければならないのです。退院して自宅で養生するのがベストですが、入院によって筋力などが落ちてしまい自宅退院が難しい場合には、いったん慢性期病院に転院してもらうことになります。そうすることによって、新たに急性期医療が必要な患者さんを受け入れることができるのです。

急性期医療を担う病院として救急診療に対応

スタッフ、医療機器の充実は必須

また、医師が少しでも入院患者さんの診療に注力できるように、風邪などの軽症の外来患者さんは、なるべく近隣のクリニックで診てもらうようにしています。高血圧や糖尿病などで定期的に医療機関を受診し薬を飲んでいるような安定した患者さんも、なるべく近隣のクリニックで診療してもらい、具合が悪くなったり、容態が変化したときには、紹介状を持って急性期病院を受診してもらう仕組みになっています。

このような急性期病院と慢性期病院の連携を「病病連携」、病院と地域のクリニック（診療所）の連携を「病診連携」と呼んでいます。

これからの地域医療構想

急性期病院、慢性期病院、地域のクリニックがそれぞれ役割を持ち、これまで以上に連携を強化して診療を行うために、地域医療構想というものが、現在全国で進められています。それぞれの地域で急性期病床、慢性期病床が何床ぐらい必要なのか、また病病連携、病診連携をいままで以上に積極的に、そして効果的に進めていくために、何が必要なのかが議論されています。

今後ますます高齢化が進むわが国で、だれもが有用な医療を受けられるためにはどうしたらいいのか。地域の実情を正確に把握し、それに向けて対策を立てていかなければなりません。そのことに、みなさん一人ひとりが関心を持っていただければと思います。

けんこうメモ！ お酒の適量について

ビアガーデンの季節。暑い日のビールはおいしく感じますよね。つい飲み過ぎてしまいがち。

お酒は百薬の長といいますが、過度の飲酒はズバリ！「生活習慣病」を引き起こします。家飲みも宴会も、節度をもって楽しみましょう。

●お酒の適量

男性でビール500mℓ、女性はその半分の250mℓ程度です。毎日に比べて、1日おきの飲酒のほうが死亡率は低いという研究報告もあります。

●お酒による健康被害

個人差はありますが、さまざまながんや肝硬変（かんこうへん）などの万病の元です。また、暴力・事故など社会的な健康被害も起こします。

過度の飲酒は本人にも周りの人々にも悪影響を及ぼします。暑いからといって飲みすぎないよう気をつけましょう。

●お酒の良い効果

少量の飲酒は、死亡率を下げ、虚血性心疾患（きょけつせいしんしっかん）・脳梗塞（のうこうそく）・2型糖尿病の疾患リスクを下げるという研究報告があります。